

クラス		受験番号	
出席番号		氏 名	

二〇一四年度
第三回 全統高一模試問題

国語 (八〇分)

二〇一四年一月実施

試験開始の合図があるまで、この「問題」冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 一、この「問題」冊子は、27ページである。
- 二、解答用紙は別冊子になっている。(受験届・解答用紙「冊子表紙の注意事項を熟読すること。」)
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば試験監督者に申し出ること。
- 四、解答選択型は、二通りある。□□□□は共通問題、□□□□は選択問題である。□□と□□のうち、どちらか一題を選択して解答すること。(選択パターン以外で解答した場合は、解答のすべてを無効とする場合がある。)

選択型 コード	選 択 型	問 題 番 号
1	現代文・古文・漢文型	□□□□□□□□
2	現代文・古文型	□□□□□□□□

- 五、試験開始の合図で「受験届・解答用紙」冊子の国語の解答用紙を切り離し、所定欄に「選択型、氏名(漢字及びフリガナ)、在学高校名、クラス名、出席番号、受験番号(受験票発行の場合のみ)」を明確に記入すること。
- 六、試験終了の合図で右記五、の□□の箇所を再度確認すること。
- 七、答案は試験監督者の指示に従って提出すること。

【共通】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 六十点)

現代の日本の社会は、思春期以降の教育課程を延々と引き延ばし、Aには十分成長をとげている個体に対して、いつまでも「社会的な子ども」というまなざしを送り続ける。思春期というのは、もともと人間社会に特有である。動物には思春期は存在しない。この事実、それが社会のあり方しだいで短くもなれば引き延ばされもする可能性を持っていることを示している。それは、半分は自然的な条件として通過しなくてはならない時期だが、半分は大人社会のシステムや大人たちの時代的な共通了解によって作られるのである。

この「子ども期の引き延ばし」の最大の要因が、豊かさの実現であることは論を俟たない。^X働かないでも親に依存して食っていける若年層が大量に発生したということが、まず大前提である。だがそこにはまた、産業構造の高度化という質的な要因も一役買っている。

農業、漁業などの第一次産業が主力であった時代には、自然の「モノ」を相手にし、それらをいかに人間に役立つものとするかという実用的な「力」や「技術」の習得が、男を一人前にする重要な条件だった。

製造業を主流とする第二次産業の時代でも、このことは基本的に変わらない。^aレイサイ業者である職人の世界には、親方と^bテイの関係を通して技術を伝授するという「一人前化」の仕組みがあった。また近代的な大工場も、優れた製品を作り上げることによって支えられており、そこに参加する圧倒的多数の若者にとって、モノ作りの^(注)スキルを身につけることが、Bな成長の条件だった。

しかし、サービスを売ることを主目的とする第三次産業の社会では、「労働」の意味が質的に違ってくる。それは、「モノ」を直接の相手とするのではなく、むしろ「モノ」を介しつつ「人」を相手とする。顧客をいかに獲得するか、作られた製品にいか

に他とは異なる付加価値を付けてみせるかといったことに、大きなエネルギーが割かれるのである。

たとえばサラリーマンと呼ばれる人種には、もちろん技術畑の専門家もいるが、彼らの多くは、企画、営業、事務処理、広告、人事管理といった、主として「人の心」をつかむ仕事に携わっている。

「人の心」ほどつかみ所のはつきりしないものはない。それは、投じた労働に対する具体的な手応えの感覚を、個人の身体に返さない。それは、目に見える「収穫」でもなく「製品」でもない。相手の反応がこちらに確信を持って与えられるということが少ない分だけ、自分の労働そのものに対する不安を呼び起こすだろう。

だから、その不安を鎮めるために、多くの企業では、組織の体質固めに神経を費やしたり、微に入り□をうがったマニュアルを作ったり、売り上げにかかわる「数字」を唯一の拠り所にしたり、時には、宗教まがいの企業理念を注入して、若い社員たちの情熱を方向づけたりする。しかし、それでもうまくいかない場合が多いようだ。

第三次産業社会におけるこうした労働の質は、一人前のスキルとは何であるかを見えにくくしているに違いない。

またしばしば指摘されることだが、次のようなことも言える。

少子化は、兄弟姉妹の少ない、あるいはまったくいない家庭環境を作り出した。兄弟姉妹がたくさんいれば、家庭のなかに一つの社会ができる。上の子は、自分が経験してきたことを下の子に伝えたり、いっしょに遊んだり、勉強や生活のめんどろをみさせられたりする。そのことで、上の子には一種の責任意識が育つし、下の子にとっては、自分の成長していく先に、年長の人たちの世界が広がっていることをあこがれや不安とともに具体的にイメージできる。当然、そこには激しい兄弟間の葛藤も生じるから、その葛藤のコクフクの経験を通して、社会的自我を鍛えることもできる。

しかし、現代の家族のように、一人っ子か、せいぜい二人っ子だと家庭が脱社会化されて、子どもが一種の無菌状態に置かれ、なかなか「社会」を実感しにくい。そのため、子どもはこの無菌状態に慣れてしまつて、外の世界に対する免疫不全に陥る可能性がある。

さらに次のようなことも言える。

現代では、多くの若者にとって、長い長い教育課程は、結果的にはサラリーマンになるためのプロセスを意味する。しかしサ

ラリーマン的なサービス仕事に必要な実用的スキルが、長い教育課程によって適切に磨かれるかと言えば、実態はまったくおぼつかない。義務教育を超えた課程で教えられているのは、生きていくことや仕事に直接役立たない、社会から隔絶した「一般教育」という **C** なお勉強が主だからである。

高等教育が大衆化した現代における大多数の大学生は、自分からほんとうに「勉強」に身をあずける気などないし、またそういうことに向いてもない。学校で教えられる内容は、将来の人生設計にもつながらないし、いま自分がそこにいることの充実の実感をも与えてくれない。彼らの多くはただ、人生の修業期をいつまでも「子ども」として留め置くという現在の社会システムを、思春期と青春期の時間を費やす形式としてひとまず引き受けて、 **D** にそこに参加しているにすぎない。

倦怠からの授業崩壊や不登校やひきこもり、アイデンティティの不安定を抱え、抽象的に肥大した自己を持て余してふらふらとした **d** フユウ感のなかをさまよい続ける者たちが大量に発生するの **y** も、けだしむべなるかな。

斎藤環氏は、いまの三十代以下の人たちに特徴的な、「自分にはなにもない」という世代感覚を強調して次のように述べる。

自分を根拠づけるリアルな拠^より所が何もないという確信が、私たちにカメレオンの多様さを可能にしたのではないでしょう。しかしその一方で、こうした確信が不適応の形をも変えてしまう。その一つの典型が「ひきこもり」であったように、私には思えるのです。何もないがゆえに、さまざまな対象に器用に同一化できるのが適応の形であるなら、ひとたびそのような同一化に失敗すると、全面撤退するほかはなくなってしまう。

「自分を根拠づけるリアルな拠り所が何もないという確信」は、どこから生まれてくるか。まとめるなら、こうした子ども・若者状況を支えているのは、第一に、平和と **E** であり、第二に、¹産業構造の高度化による「一人前」意識の習得のむずかしさであり、第三に、 **F** による家庭環境の脱社会化であり、そして第四に、子どものためには身を削^{けず}っても惜しくないという日本の親たちの価値観が作り出した、実用効果の乏しい高等教育の大衆化である。

これらはみな、相互に共犯関係にある。

現在の親たちの多くは、豊かさによって得られたストックの多くの部分を、少なく産んだ子どもたちの養育費に注ぎ込んできた。それはそれで非難すべきことではない。しかしその結果が、いつまでも続く「学校生徒」という囲いの内外をめぐって適²応・不適応のアイデンティティ・ゲームを繰り返すだけのたくさんの息子たちを産んできたこともたしかなのである。彼らは、社会への突破口を見出せず、なかなか「大人」というイメージをわがものにできないのだ。

(こはまいつお 小浜逸郎『男』という不安)

(注) ○ スキル……熟練した技術。

○ ストック……貯めたもの。蓄え。

問一 傍線部 a～d のカタカナを漢字に改めよ (楷書で正確に書くこと)。

問二 空欄 に入れるのに最も適当な漢字一字を答えよ。

問三 空欄 A D に入れるのに最も適当な語を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ語を繰り返し用いてはならない。

ア 抽象的 イ 消極的 ウ 能動的 エ 肉体的 オ 社会的

問四 傍線部 X・Y の意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

X 論を俟^またない

- ア 言うまでもない
イ 問題となっている
ウ ひとまずおいておく
エ きちんと議論する必要がある
オ いますぐ考えなければならぬ

Y けだしむべなるかな

- ア 不思議な問題だなあ
イ 本当に困った問題だなあ
ウ たしかにもっともなことだなあ
エ 本当かどうか疑わしい問題だなあ
オ いまでは誰もが知っていることだなあ

問五 空欄 E・F に入れるのに最も適当な単語を、本文中からそれぞれ抜き出して答えよ。

問六 傍線部 1 「産業構造の高度化による『一人前』意識の習得のむずかしさ」とあるが、「産業構造」が「高度化」とすると『「一人前」意識の習得」が「むずかし」くなるのはなぜか。本文に即して百字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

問七 傍線部2「適応・不適応のアイデンティティ・ゲーム」とあるが、「適応」している子どもや若者は、どのようなあり方を示すのか。それを比喩的に言い表した十字以内（句読点や記号も字数に含む）の語句を、本文中から抜き出して答えよ。

問八 筆者の考えに合致するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 現代日本の社会はいつまでも子どもであり続ける若者を生み出したが、彼らの抱えている欠点の一つに、学校で教えられた実用的な知識を実社会で応用することができないということがある。

イ 若者たちのなかには「自分にはなにもない」という独特な世代感覚を持つ者が増加しているが、そのことこそが、現代日本の家庭のなかに脱社会化という問題を発生させた要因だと考えられる。

ウ 現代の若者は確固としたアイデンティティを持ちにくくなっているが、そのことの背景には、思春期は延長されてもよいということが現代社会のなかで共通了解になっているという事情がある。

エ 高度な産業社会のなかで一種の無菌状態に置かれることになった現代の若者は、「一人前」意識を獲得できないばかりでなく、自己について考え悩むということもほとんどなくなってしまった。

オ 若者が「一人前」意識を得るには自立した生活を送ることが不可欠だが、現代の産業社会においては、親たちが子どもを必要以上に過保護に扱うため、子どもの自立が困難になってしまっている。

国語の問題は次の頁へ続く。

【共通】

次の文章は、日系アメリカ人の父と日本人の母との間に生まれた筆者によるものである。これを読んで、後の問に答えよ。

(配点 五十点)

父親が英語、母親が日本語という、もとも身近にあった言語の二重性は、東京から岩国^㉔へと移ったあと、それまでの幼児の段階から、いくつもの段階を急激に上昇することとなった。幼児は成長していったからだ。二重性は言語だけではなく、ある日を境にして、日本そのものが二重になった。戦前から続いていた日本という、日本のどこにでも存在していた日本に、ごく一時的ではあったにせよ、オキュパイド・ジャパン（占領下の日本）という性質の日本が、覆いかぶさることとなった。

敗戦の次の日から、と言っているほどの突然さで、戦後における父親の仕事はGHQ民生局の現地雇いの職員、というものとなった。戦後の日本を民主主義の国へと転換させるため、アメリカから多数の女性将校たちが送り込まれた。そのうちのひとりの、通訳を含めてあらゆる仕事領域での補佐を、父親は仕事として忙しくおこなない始めた。ごく当然のこととして、日常生活はオキュパイする側へと大きく傾いた。これを日常の二重性と呼んでもいい。

¹ こうしたことをすべてに関して、子供の僕はなんともなかった。二重性があるならあったでいっこうに構わない、どちらでもいい、という子供の気楽さだ。時によって多少の振幅はあったかと思うが、基本的にはどちらも、僕にとっては対等のものだった。あらゆることの根底にあったのは言葉の二重性だが、これはもともと簡単なことであり、混乱はまるでなく、したがって他のことすべてがそれに準じた、という理解をいまの僕はしている。言葉の習得能力は遺伝であらかじめ伝えられていた。その能力が、環境に対応して、ごく普通に働いただけのことだ。

重なってはいるけれど混乱はしなかった。したがって、どちらでもよかった。とは言え、軸足あつての、どちらでもいい、という気楽さだったはずだ。子供の僕の核心に、より深く届いていたほうがドミナントだったと考えるなら、それは英語のほうだ。なぜ英語だったのか。² 実用的だったからだ。英語という言葉はアクションに即しているから、という言いかが出来る。考える

ときに使った言葉が、圧倒的な優位を保って英語だったから、と言ってもいい。

具体的な事実関係に即して、そのことだけについて述べる言葉、という性格が英語には強くある。子供の僕はここに、根源的なと言っているほどの共感を覚えたのではなかったか。事実関係だけを述べるのだから、相手は単なる相手でしかなくなる。相手の属性をすべて削ぎ落とすことが自動的に可能だから、自分が喋る言葉にとって、前方への見渡しや広がりには邪魔がなく、そのことによる快感のようなものが、アクションのしやすさに重なった。

相手との関係には上下がなくなり、水平さだけが残る。言葉にはアクションがともない、そのアクションに際しての心の動きには、上下へのぶれが求められないぶん、水平面での広がり大きく滑らかとなる。世界を広く見渡すことが出来る。言葉の汎用性がきわめて高い。したがって、抽象性をおびたことや、間接性のあることなどについて、驚くべき語りやすさがある事実には、子供だからこそ、すんなりと気づいた。だから子供の僕にとって英語は使いやすい言葉だった。

日本語には言葉が人それぞれの個人的な体験と結びつくことによる直接性が常にあり、言葉の汎用性がその直接性によって、ことあるごとに邪魔される。その結果として、世界は言葉ごとに限定を受け、見とおしは悪くなる。英語はアクションとその準備のための言葉だ。抽象性をおびたことや間接的なことが言いやすくて初めて、具体性というものが成立する。子供の僕への英語の inputs を、父親ひとりに仮に限定して単純化すると、父親のアクションは言葉であり、言葉はそのままアクションだった。それは子供の僕が笑ってしまうほどに一貫して、合目的性へと統制されていた。まず信頼すべきは言葉であり、それを確実に裏付けるのがアクションである、ということだ。

日本語をめぐる母親からの教えは、ひと言で言うならきわめて主観的なものだった。自分が思ったこと、そのときふと頭に浮かんだこと、自分で気になることなどを、そのときどき、とりとめなく、一貫性もないままに、関西弁で命令するかのように僕に喋った。いいときも確実にあったが、母親からの教えは、おおむね反面教師として僕に作用した。

僕がもつとも記憶しているのは、ドッカイリヨクだ。読解力、と書く。³ことあれば母親は読解力の大切さを強調していた。本を読み、ということだ。常に本を読む人になれ、読んだら正しく理解の出来る人となれ、という教えだ。そのことをとおして自

分を作っていけ、というような意味も含まれていたのだろう。「本、読まへんかったらなあ、しまりのない表情の、阿呆面あほうづらになんねん。あんたも、どっちゃねん言うなら阿呆面やさかい、読むことを怠おこらず、ぎょうさん読まなあかんんで。本やったら、なんぼでも買うたるさかい」という読解力の呪文は、しかしいまでも僕のどこかで残響している。

母親がしきりに言った、読む、とは A のことでもあった。その限りでは母親の言ったことは一貫していた。いつもおなじ忠告を繰り返していたのだから、全体性のようなものはそこにはなく、見とおしもなかった。読むだけで充分だったようだし、書くのはまったく別のことだ、と考えていたようだ。書くにあたっては文才が必要である、というようなところへ一足飛いっそくびにいき、その文才なら母親である私から引き継いでいるはずだ、という樂觀のなかにいた。文才というものを僕が自分に感じたことは、これまで一度もなかった。

英語はアクションに即した言葉だ、とさきほど書いた。即しているだけではなく、言葉そのものがアクションでもある。A するよりも音読したほうがいい。いいとは、そのほうが、のちのち自分のためになる、というような意味だ。音読したほうが英語として正しいからだ。そしてせっかく音読するなら、椅子にすわったままではなく、立ち上がったほうがいい。立ち上がるだけではなく、歩きまわるとなおい。身ぶり手ぶりが加わると、さらに好ましい。こうしたアクションは英語のリズムと連結している。正しいリズムに体は逆らえない。正しいリズムであること、という厳しい注意書きつきで、体が覚えるとはこういうことだ。喋るときでも、喋る内容にアクションが同調していると、話している内容は難なく伝わる。

父親に関して思い出すことのひとつは、彼がなぜか常に打っていたタイプライターの音とリズムだ。音そのものは、ご苦労さんなアナログ機械の音だったが、その音は当時なりにアメリカの音として仕上がっていた。英語の人がタイプライターを打つと、その音のリズムは英語のリズムになった。タイプライターという機械で英語の文章を綴つづっていくときのリズムだが、そのリズムは英語の文章が内蔵しているリズムだ。

自分のものとして使う言語によってその人の思考がきまっていく、と言われている。その言語が世界をどのようにとらえ、それをどんなふうに言いあらわす能力を持っているのかという問題が、そっくりそのまま、その言語を使う人の世界のとらえかた

と言ひあらわしかたになつていく、という意味だ。森羅 B を最小単位まで切つていき、それぞれに対して言葉にあたえ
と、そこに単語というものが生まれる。だから単語はどれもみな、最小単位まで切つていかれる以前の、森羅 B を背負つ
ている。この事実は何の言語においてもおなじだ。世界をどうとらえてどのように言いあらわすか、ということのぜんたいは、
その言語を自分のものとして使う人たち全員にとっての、暗黙の了解というもののなかに隠れている。⁴ 外国語の学習者は、こう
いうものを相手にしなくてはいけない。

(片岡義男『言葉を生きる』)

(注) ○ 岩国……山口県東部の市。在日米軍の基地がある。

○ GHQ……連合国軍総司令部。アジア太平洋戦争の終結後、占領下に置かれた日本を管理するために設置された最高機関。

○ ドミナント……支配的なもの。優位にあるもの。

問一 波線部 a～c の漢字の読みを、ひらがなで答えよ。

問二 空欄 A ・ B (ともに二箇所ずつある) に入れるのに最も適当な漢字二字の言葉を、それぞれ答えよ。ただし、

A は「音読」の対義語、B は四字熟語の一部である。

問三 傍線部1「こうしたことすべてに関して、子供の僕はなんともなかった」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 戦後日本の社会には二重性が生じたが、幼いときから英語と日本語という言語の二重性に向き合いつつ生きるしかなかった「僕」にとって、新たに生じた社会の二重性は、むしろ歓迎すべきことのように感じられたから。

イ 敗戦によって社会には二重性が生じていたが、多くの大人がそれに翻弄されていたのに対し、「僕」は子供であり言語の二重性にもすぐに順応できたため、社会に存在した二重性についてもさほど深刻だとは感じなかったから。

ウ 敗戦後の混乱によって社会には二重性が生じており、「僕」も英語と日本語という二重の言語環境で育ってきたが、社会の二重性と言語の二重性とは、似たような問題に見えて実は別種の問題にすぎなかったから。

エ 日常のあらゆることの前提には英語と日本語という言語の二重性の問題が存在していたが、「僕」は、英語に立脚しながら日本語も対等なものとして自然に受け入れるというかたちで、その二重性を難なく受容していたから。

オ アメリカの占領政策によって日常生活のなかに二重性が生じていたことは事実だが、そうした二重性はあくまで大人社会の問題であり、子供であった「僕」の生活に影響を及ぼすようなものではなかったから。

問四 傍線部2「実用的だったからだ」とあるが、「僕」にとって、英語のどういうところが「実用的」だったのか。本文に即して七十字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

問五 傍線部3「ことあれば母親は読解力の大切さを強調していた」とあるが、このことについての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 母親の意見は日本の伝統的な価値観を何の疑いもなく押しつけるものであり、アメリカ文化にも親しんでいた「僕」にとって、それは積極的には受け入れられないものであった。

イ 母親の言葉には一面的なところがあり、言っていることも個人的な思い入れに近いものだといえるが、そんな彼女の言葉に、「僕」はその後もずっととらわれ続けることになった。

ウ 本を読みさえすれば賢くなれるという母親の言葉を、「僕」はあまりに短絡的だと感じていたが、その言葉が子供の将来を思う愛情から発したものだということは、漠然とではあるが理解していた。

エ 母親の口から思いつきのように出てくる言葉は、時によって変化する一貫性のないものでしかなかったため、子供だった「僕」はそうした言葉に反発し、かえって読書と疎遠になってしまったところがあった。

オ 子供の頃の「僕」は、母親の言葉を自分の考えを押しつけてくるものととらえ、それに反発していたが、成長するにつれてその重要性が実感され、彼女の言葉を深く心に刻むようになった。

問六 傍線部4「外国語の学習者は、こういうものを相手にしなくてはいけない」とあるが、これはどういうことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 外国語を習得しようとする、その外国語によって育まれた歴史や文化についても理解を深めていかなければならず、単なる言語の学習を超えた広い範囲での学習が必要になってくるということ。

イ 外国語を習得しようすると、その外国語を母語とする人々によって共有されている社会的規範をも理解する必要性が生じてくるが、そうした規範は暗黙の了解のようなものでしかないということ。

ウ 外国語を習得しようすると、その外国語を母語とする人々の間で自明なものとして共有されている世界認識のありかたと、自分の世界認識のありかたとの違いといった問題に、直面せざるをえないということ。

エ 外国語を習得しようすると、その外国語を含めあらゆる言語に共通する世界のとらえかたというものをあらためて認識する必要がでてくるが、そのためには並大抵ではない苦労がともなうということ。

オ 外国語を習得しようすると、その外国語を母語とする人々も意識していないような、その言葉特有の思考方法をも習得する必要があるが、そうしたことが習得できる者は現実にはほとんどいないということ。

問七 本文の内容に合致するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 敗戦後の日本はアメリカの厳しい管理下にあり、そこではすべての日本人が被占領民という屈辱感を抱いていた。

イ 母親の言葉が個性的だったことで、筆者は、日本語が話し手の個人的体験と深く結びつく言語であることを知った。

ウ 戦前の社会から新たな日本社会への転換は劇的なものであり、そのことは若い筆者にも少なからぬ衝撃を与えた。

エ 日本語で文章を書くためには特別な才能が必要であり、それは努力だけでは養えない天賦^{てんぷ}のものである。

オ 行為と不可分な言語である英語では、会話ばかりでなく読み書きにおいても身体のリズムとの同調が重要になる。

国語の問題は次の頁へ続く。

【共通】

次の文章は、『平家物語』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。(配点 五十点)

三月十日、除目行はれて、平家の人々、大略官加階し給ふ。四月十五日、前権少僧都顕真日吉の社にして如法に法華經一万部転読することありけり。御結縁の為に、法皇も御幸なる。何者の申し出だしたりけるやらん、一院、山門の大衆に仰せて、平家を追討せらるべしと聞こえしほどに、軍兵内裏へ参りて、四方の陣頭を警固す。平氏の一類、みな六波羅へ馳せ集まる。本三位中将重衡卿、法皇の御迎へに、その勢三千余騎で、日吉の社へ参向す。山門にまた聞こえけるは、「平家、山攻めむとて、数百騎の勢を率して登山す」と聞こえしかば、大衆みな、東坂本におり下つて、「こはいかに」と僉議す。山上洛中の騷動¹のめならず。供奉の公卿殿上人²を失ひ、北面の者の中には、あまりにあわて騒いで、黄水³つく者多かりけり。本三位中将重衡卿、穴太の辺にて法皇迎へとり参らせて、還御なし奉る。「かくのみあらむには、御物詣なんども、今は御心にまかすまじきことやらん」とぞ仰せける。まことに山門大衆、平家を追討せむといふこともなし。平家、山攻めむといふこともなし。これ跡形なきことどもなり。「天魔のよく荒れたるにこそ」とぞ人申しける。同じき四月二十日、臨時に二十一社に官幣あり。これは飢饉⁴疾疫によつてなり。

五月二十四日、改元あつて、寿永と号す。その日また、越後国の住人、城四郎助茂、越後守に任ず。兄助長逝去の間、不吉なりとて頻りに辞し申しけれども、勅命なれば力及ばず。助茂を長茂と改名す。

同じき九月二日、城四郎長茂、木曾追討のために、越後、出羽、会津四郡の兵どもを引率して、都合その勢四万余騎、木曾追討の為に信濃国へ発向す。同じき九日、当国横田河原に陣を取る。木曾は依田城にありけるが、これを聞いて依田城を出でて三千余騎で馳せ向ふ。信濃源氏、井上九郎光盛がはかりごとに、にはかに赤旗を七流れつくり、三千余騎を七手に分かち、あそこの峰、ここの洞より、赤旗ども手々にさしあげて寄せければ、城四郎これを見て、「あはやこの国にも、平家の方人する人ありけりと、力付きぬ」とて、勇みののしるところに、次第に近うなりければ、合図を定めて、七手が一つになり、一度に関をど

つとぞ作りける。用意したる白旗ざつとさしあげたり。越後の勢どもこれをみて、「敵何十万騎あるらむ。いかげせむ」と
[]を失ひ、あわてふためき、或は川に追つばめられ、或は惡所^(注20)に追ひ落とされ、助かる者は少^Bなう、討^eたる者ぞ多かり
ける。城四郎がたのみきつたる越後の山の太郎、会津の乗丹房^{じようたんぼう}なんどいふ聞⁴こゆる兵ども、そこにてみな討たれぬ。我身手負
ひ、からき命生きつつ、川に伝うて越後国へ引き退く。

同じき十六日、都には平家これをば事ともし給はず。前右大将宗盛卿、大納言に還^(注21)着して、十月三日、内大臣になり給
ふ。同じき七日、悦^{よろこびまし}申あり。当家の公卿十二人扈從^{こしやう}せらる。藏人頭以下の殿上人十六人前驅^{せんぐ}す。東国北国の源氏ども、蜂の
ごとくに起^{おこ}りあひ、ただ今都へ攻めのぼらむとするに、かやうに波の立つやらん風の吹くやらんも知らぬ体^{てい}にて、花やかなりし
ことども、なかなかいふかひなうぞ見えたりける。

(注) 1 除目……官人を任命する儀式。 2 如法……形式通り。 3 転読……經文を略して題目や要所を読むこと。

- 4 結縁……仏道と縁を結ぶこと。 5 法皇……後白河法皇。後出の「二院」も同一人物。
6 山門の大衆……「山門」は比叡山延暦寺のこと。「山」もこれに同じ。「大衆」はその僧たち。
7 陣頭……宮中を警護する衛士^{えし}の詰め所の前。 8 六波羅……平家一門の邸宅があつた場所。
9 本三位中将重衡卿……平重衡。清盛の五男。 10 洛中……都の中。 11 北面……法皇の御所や身边を警護する武士。
12 黄水……胃から吐き戻す胆汁の混じつた黄色い水。 13 官幣……諸国の官社を総轄する役所から、格式の高い神社に奉納する物。
14 木曾……源氏の武將源義仲^{みなもとのよしかた}。「木曾義仲・木曾冠者」などと呼ばれた。
15 会津四郡……陸奥国^{むつくに}の会津・大沼・河沼・耶麻^{やま}の四郡。現在の福島県西部。
16 赤旗を七流れ……赤い旗を七本。なお、赤は平家、白は源氏の旗。 17 洞……谷。
18 関……士気を鼓舞し、敵に対して戦闘の開始を告げるために発する叫び声。 19 追つばめられ……追い落とされ。 20 惡所……険しい所。
21 還着……復任。 22 悦申……天皇に任官のお礼を申し上げるために宮中に参上する儀式。
23 扈從……貴人の供をすること。

問一 波線部 a・e の助動詞の文法的意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。(同じ記号を繰り返し用いてもよい。)

ア 完了	イ 自発	ウ 推量	エ 詠嘆	オ 受身
カ 過去	キ 存在	ク 尊敬	ケ 断定	コ 伝聞推定

問二 二重傍線部 A・B を、音便を含まない形に改め、すべてひらがなで記せ。

問三 傍線部 1・4・6 の意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

1 「なのめならず」

ア 静まらない	イ 深刻ではない	ウ 普通ではない	エ 広がらない
---------	----------	----------	---------

4 「聞こゆる」

ア 賢明な	イ 評判の	ウ 勇敢な	エ 相当の
-------	-------	-------	-------

6 「なかなか」

ア まったく	イ そこそこ	ウ たいそう	エ かって
--------	--------	--------	-------

問四 本文中二箇所の空欄 にはいずれも同じ語が入る。これらを埋める語として最も適当なものを、次の中から一つ選
び、記号で答えよ。

ア 色 イ 時 ウ 名 エ 品

問五 傍線部2「天魔のよく荒れたるにこそ」とあるが、世間の人はどのようなことに対してこう言ったのか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 後白河法皇が、一度は延暦寺の僧に平家追討を命じながら、平家の圧力に負けて取り下げたこと。
イ 後白河法皇を警護する武士が、延暦寺の僧が攻めて来るとい^う噂を聞いて、極度に動揺したこと。
ウ 延暦寺の僧と平家の一門が、お互いに相手が攻めて来るとい^う根拠のない噂に振り回されたこと。
エ 本三位中将重衡卿が、後白河法皇に対して、自由に寺社へ参詣できないように制限を加えたこと。

問六 傍線部3「力付きぬ」とは、どういう気持ちを表しているか。本文に即して具体的に五十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問七 傍線部5「波の立つやらん風の吹くやらんも知らぬ体」とは、誰のどのような様子をたとえたものか。これを示す本文中の表現を十五字以内（句読点等を含む）で抜き出して記せ。

【四】現・古・漢型

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の都合で返り点・送り仮名を省略したところがある。)(配点 四十点)

陳留^ニ時^リ為^ニ大郡^一、号^{シテ}称^ス多^{シト}士^一。琅邪^{ラウヤ}王澄^{キテ}行^{タリ}經^ニ其界^一。太守^ノ呂予^一遣^ニ吏迎^一之。

澄^リ入^レ境^ニ、問^{ヒテ}吏^ニ曰^ク、「此郡^ノ人士^ハ為^レ誰^ト。」吏^曰、「有^ニ蔡子尼^一、江応元^一。」是^ノ時^ニ郡人^一

多居^ニ大位^一者。澄^テ以^ニ其姓名^一問^{ヒテ}曰^ク、「甲乙^ハ等^ハ非^ズ君^ノ郡人^ニ邪^ト。」吏^曰、「是^ト也。」曰^ク、

「然^{ラバ}則^チ何^ヲ以^テ但^{タダ}称^{スル}此^{ナル}二人^{ヤト}。」吏^曰、「向^ニ謂^{おも}君侯^フ問^フ人^ヲ、不^ト謂^ハ問^フ位^ヲ。」澄^{ヒテ}笑^レ而

止^ム。到^リ郡^ニ、以^テ吏^ノ言^ヲ謂^{ヒテ}予^ニ曰^ク、「旧^{ふる}名^キ此郡^{ヨリ}有^{アリ}風俗^ノ。」果然^{シテ}。小吏^モ亦^カ知^ル如^{コト}此^{シト}。」

(『晋書』による)

(注) ○陳留……郡の名。 ○士……立派な人。後の「人士」も同じ。 ○琅邪王澄……「琅邪」は地名。「王澄」は人名。

○界……地域。ここでは陳留を指す。 ○太守呂予……「太守」は郡の長官。「呂予」は人名。 ○吏……小役人。「小吏」も同じ。

○蔡子尼、江応元……いずれも人名。 ○君侯……あなた様。 ○到郡……郡の役所に到着する。

問一 傍線部 a 「然則」・ b 「向」・ c 「亦」の読みを平仮名で記せ。(現代仮名遣いでもよい。)

問二 傍線部1「遣^ニ吏迎^レ之」を、書き下し文に改めよ。(現代仮名遣いでもよい。なお、「遣」は使役を表し、「使」と同じ読み方・用法である。)

問三 傍線部2「郡人多居大位者」は、「郡の人に大位に居る者多し」と読む。この読み方に従って、解答欄の原文に返り点を施せ。(送り仮名は不要。)

問四 傍線部3「何以但称此二人」を、「此二人」の指す内容を明らかにして現代語訳せよ。

問五 傍線部4「旧名此郡有風俗」とはどういうことか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア この郡は高い官職に就いた者を敬う風潮があることで昔から知られている。

イ この郡は立身出世の機会をつかみやすいことで昔から知られている。

ウ この郡は昔ながらの珍しい風習が色濃く残っていることで知られている。

エ この郡は昔をしのばせる名所旧跡が数多くあることで知られている。

オ この郡は人格を重んじる優れた気風があることで昔から知られている。

問六 傍線部5「果然」とあるが、王澄がどのように判断した理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 小役人が、「人土」と聞いて、郡中に大勢いる立派な人物の名前のうち、ただ二人の名前しか挙げられなかったから。
イ 小役人が、「人土」と聞いて、地位のある人のことではなくて、人徳のある人のことを言っていると受け取ったから。
ウ 小役人が、「人土」と聞いて、郡中に大勢いる高官の名前を挙げないで、あえてつまらない人物の名前を挙げたから。
エ 小役人が、「人土」と聞いて、人望のある昔の人物ではなく、成功した現在の人物のことしか思いつかなかったから。
オ 小役人が、「人土」と聞いて、古くからの作法に通じた人物ではなく、ただ有名なだけの人物のことだと考えたから。

国語の問題は次の頁へ続く。

【五】現・古型

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 四十点)

山僧(注1)の学生(注2)、説経師(注3)なるありけり。山にて仏事あるに、唱導(注4)して、母の、子を思ふことかたくなること申し立てて、すなはち「愚僧が母、京に候ふに、申すべきことありて出京して侍りしが、させることありて、雪の中に登山つかうまつりしほどに、雪風おびたたく侍りしままに、西坂本より京へ帰り侍りしが、さるほどに雪はやみぬ。四条の橋に、女房(注5)の、女童(注6)具して西へ行きしを、いかなる人にやと見るほどに、母にて候ひける。『あらうれしや。御坊(注7)の、この雪風にいかなるあやまちもあるらむと思ひて、家にも居られずして、山の方をも見て心なぐさめむと思ひたれば、別事(注8)なかりける』とて、あひ具して帰って、見上げ見下ろしとかくいたはりて、『山に御坊ほどの 2 僧、何人ばかりある』と問ひて侍りし。御覧候へ。これほどにわろく候ふ面(注9)を、人の親のかたくななる心、かやうに申して候ひし』とて、礼盤(注10)に居ながらあちこちねぢむきて人に見えけり。面を見ては笑ふ人あり。母の心を感じては泣く人もありけり。まのあたり聴聞(注11)したる山僧の物語なり。

宇都宮(注12)の紀の党にて乙貫(注13)の新左衛門(注14)と申ししは、聞こえたる勢兵(注15)なり。矢は十三束三伏(注16)なり。矢つみて侍りし。その母、縁に付きて常州(注17)のある入道とあひ住み侍りけるが、山伏修行者の「何にてもたまはり候はむ」といふを、入道あひしらひて、「いづくよりおはするぞ」といふに、「京の方より」と答へけり。尼公(注18)聞きて、「あれていの修行者は、おそろしき強盗(注19)なんどもあるに」と、あひしらひ給ふとてぶしぶしと腹立ちけれども、入道呼び入れて京の方のこと問ひければ、「宇都宮殿(注20)、大番(注21)に上洛候ひし、四の宮河原にて見物して候ひし。乙貫の新左衛門尉(注22)とかや申し候ひし、大矢、人柄もよく候ひし。人々、目を驚かして褒め沙汰し候ひし」といふ時、尼公、心地よろこばしくして、「あの御坊に、僧膳よくしてまゐらせよ。御酒まゐらせよ」と下知(注23)して、帷(注24)一つ取らせけり。近く侍りしままに、確かに聞きしことなり。かの入道は知人なり。いかなる孝養の子も、親を褒めむに、これほどに喜ぶことあらじ。

猊(注25)までも、母の、子を思ふこと。漢土(注26)に鄧隱峯(注27)といふ禪師(注28)ありけり。在俗の時、猿の母子、木に並びてあるを、子を射落とし

たりければ子死にけり。母、やがてつづきて落ちて死にけり。母が腹を開きて見るに、腸寸々に切れたり。子を愛しむ心、切にして、腸の切れたるなるべし。これを見て、弓矢を折り棄てて出家して貴き禅師となりけり。悪すなはち善の資けなりといひて、悪事善縁となること、これある故なり。

（『雑談集』）

- （注）
- 1 山僧の学生……比叡山延暦寺の学僧。
 - 2 説経師……仏の教えを説き聞かせる僧。
 - 3 唱導……仏の教えを説き仏道に導くこと。
 - 4 させることありて……重大な用事ができて。
 - 5 西坂本……都からの比叡山への登り口。
 - 6 女房……婦人。
 - 7 女童……召し使いの少女。
 - 8 礼盤……説経師の着席する壇。
 - 9 ねぢむきて……体をねじって顔を向けて。
 - 10 宇都宮の紀の党……下野国（現在の栃木県）の宇都宮を拠点とする武士団。
 - 11 勢兵……弓の名手。
 - 12 十三束三伏……矢の長さ。通常の長さは十二束。
 - 13 矢つみて侍りし……矢を巧みに射ました。
 - 14 常州……常陸国（現在の茨城県）。
 - 15 ぶしぶしと……手厳しく。
 - 16 大番……諸国から交替で皇居の警備に当たる武士。
 - 17 四の宮河原……現在の京都市山科区の地。東国から都に入る道筋に当たる。
 - 18 大矢……特別に長い矢を使う人のことで、弓の技量にすぐれていることをいう。
 - 19 帷……単衣の衣。
 - 20 漢土……中国。
 - 21 禅師……僧の敬称。

問一 傍線部1「家にも居られずして」とあるが、ここにかがえる母の心情として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア わが子の身の上を案じて、気がかりに思う気持ち。
- イ わが子と再び別れてしまって、寂しく思う気持ち。
- ウ 母の心を解さぬわが子を、腹立たしく思う気持ち。
- エ わが子とまた会えるのを、待ち遠しく思う気持ち。

問二 空欄 2 を埋めるのに最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア みめよき イ 心よき ウ みめあしき エ 心あしき

問三 傍線部3「あひしらひ給ふ」・4「腹立ちけれども」の主語は誰か。その組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 3 尼公 4 入道
イ 3 尼公 4 山伏修行者
ウ 3 入道 4 尼公
エ 3 山伏修行者 4 尼公

問四 傍線部5・7の意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

5 「下知して」

- ア 感心して イ 指図して ウ 同情して エ 納得して

7 「やがて」

- ア いつの間にか イ 思いがけず ウ そのまますぐに エ やはり

問五 傍線部6「いかなる孝養の子も、親を褒めむに、これほどに喜ぶことあらじ」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 子を褒められた時の親の喜びは、親を褒められた時の子の喜びには及ばない。
- イ 親を褒められた時の子の喜びは、子を褒められた時の親の喜びには及ばない。
- ウ 親がよくできた子を褒めるのは当然であり、これ以上に喜ばしいことはない。
- エ よくできた子が親を褒めるのは当然であり、これ以上に喜ばしいことはない。

問六 傍線部8「母が腹を開きて見るに、腸寸々に切れたり」とあるが、この箇所にかがえるようなこらえきれないほどの悲しみを「□□の思い」と言う。この空欄に漢字二字を入れて表現を完成させ、答えよ。

問七 傍線部9「悪すなはち善の資けなり」とあるが、①「悪」・②「善」の内容を、本文に即して具体的に、かつ、解答欄の形式に合うよう、それぞれ十字程度（句読点は不要）で答えよ。

© Kawaijuku 2014 Printed in Japan

無断転載複写禁止・譲渡禁止